シンポジウム「女と書き物―女が読む／女が書く／女を描く」の概要について

高崎みどり

1. シンポジウムのテーマについて

「ジェンダー」「セクシュアリティ」「女性性」等は、最近の文学・語学研究にとっても重要な問題系であり、具体的な諸メディアにおいてそれらの表象が見出され分析されているため、多くの研究者が注目するところとなっている。

会場校であるお茶の水女子大学は、専門分野・領域を超えて“女性学”という共通認識のもと、ジェンダー研究センターをはじめとして各種プロジェクトに実績を持ち、トポス的にもこうした問題についてのシンポジウムを行うにふさわしいと言える。

こうしたことを踏まえて、「ジェンダー」「セクシュアリティ」「女性性」等を表現学に具体的に結びつけたテーマ「女と書き物―女が読む／女が書く／女を描く」が決まり、日本語学・日本文学において、先端的な研究を行っている4人の研究者に、各自の研究をこうしたアプローチから改めて見つめてみたらどうかという提案を行った

何回かのメールや会合でのやりとりを重ねるうち、テーマについての共通理解が形成されてきた。それに伴い、各自がテーマをそれぞれの領域に引き付けて解釈し、徐々にオリジナルな方向性や対象に切り込む角度が定まってきた。それは、染谷裕子氏は、お伽草子を材料に“女を描く”という角度、中里理子氏は、雑誌を材料に“女が読む”という角度、菅聡子氏は、林芙美子の従軍記・小説作品を材料に“女が書く”という角度、平田由美氏は、後藤明生の作品を材料に“女が書いたものを書き換える”という角度である。

2. シンポジウム当日の概要

しかし実際のシンポジウムにおいては、もはやそのような単純な角度に収まりきらない、創見や拡充が見られ、テーマ自体が発議から動態的に成長するのを目の当たりにして、シンポジウムという形式の持つ力・有効性を実感した。

シンポジウム当日の実際の各自の演題と内容を簡単に紹介する。

染谷氏は「お伽草子における美人描写の類型化～その意味を考える」として、お伽草子に描かれる美人描写の類型句が、“女が読む”女訓書にも挿入されることで、女を規格化し、不合理な役割分担に追いやることの一端を担った可能性を指摘した。

中里氏は「若者ファッション雑誌に見る男女の文体差―開拓する女性雑誌の文体」として、女性向けファッション誌

と男性向けファッション誌を文体比較し、女性誌の方が和語を生かした感覚的表現、若者語・造語など自由な語彙使用が多く、また表記面でも多彩な表現の工夫が見られること。男性誌が女性誌の後追いをするような表現面の変化を見せていること、男性性・女性性にむすびつく評価語では男女差が縮まる傾向にあること、等を指摘した。

菅氏は「林芙美子は敗戦をどう語ったか―戦場のジェンダー、敗戦のジェンダー」として、林芙美子の作品からの言説を中心に、戦場における当事者性と非当事者性のゆらぎ、また敗戦における〈文化／自然＝男／女〉というジェンダーの再配備等々を指摘した。

平田氏は「女の書き物を奪胎する：後藤明生の文学言語におけるジェンダー」として、母の手紙を引用、加工、変形して換骨奪胎し、また間テクスト的に夥しいテクストを取り込んで成立展開するまでの後藤明生の文学言語獲得について述べた。

以上の発表内容について、会場との質疑応答がなされたが、いずれもその場で簡単に答えてしまうには惜しい問題提起やコメントであり、また時間制限の中で精一杯こたえようとする発表者の補足発表も聞き応えがあった。

3. 司会を終えて

シンポジウムのさなかにも、テーマが熟成し、会場全体の中に、テーマの意義への理解が形成されて、それが発表者にも返っていく様相が印象的であった。後の4人の発表者の論考は、それらを生かしきったものとなっていよう。

論考を見ると、シンポジウムの時よりも、発表相互の関連性が、より明瞭な形で浮かび上がってきているのではないかと思われる。

例えば、「お伽草子の美人描写―女が読む／女を描く」と「若者ファッション雑誌に見る男女の文体差」は、両者とも語句レベル、文体レベルでの、“すがたかたち”に対する価値付け表現を扱うことで共通している。しかし、その女性性の提示の方向は、定型化による収斂と差異化による拡大、また、男女両方に対しての使用から女性中心へと向かう傾向と、女性中心使用から男性に対しても使用の萌芽もみられる傾向など、対照的な様相をみせている。一方で、“すがたかたち”を形容・説明するだけの、いわばエンターテイメント的、“お約束”的に使用された語句や語句の集合が、言語実践として意味の実質化を伴い、ある種の規範・理想の提示として機能してしまうことで、ジェンダー強化に結びつく可能性をも明らかにしているのではないか、ということが言えそうだ。

「林芙美子は敗戦をどう語ったか―戦場のジェンダー、敗戦のジェンダー」と「女の書き物を奪胎する―後藤明生における“父の物語”の創生」は、戦争に関わる女の書き物が、テクストレベルにおける移行を経て作品化するプロセスを扱っていることで共通している。もともとの、〈女が書く〉現場であった「1冊のノート」や「母の手紙」は、その観察した戦場の真実(記憶)自体、そしてその表現のありよう自体が、ジェンダー転倒的であるということも、あるいは共通しているかもしれない。平田氏は、そうしたプ

ロセスについて、「奪胎する」という語に、慣用句的意味のみならず、“母と父”という二項対立のうちの女性性を強く示すところの“母”から、母たることの象徴、子であることの根源である“胎”を奪って“生まれ直す”という文字通りの意味をすべりこませているように思える。

以上のように、書く主体、読む主体、描かれる対象としての“女”は、いろいろなテクストにおいてジェンダーの桎梏に順応したり、さらに強化したり、闘争したり、転覆したりしているが、これらのジェンダーに対する多面的な態度は、一つの時代においても、一つのジャンルについても、もちろんひとりの個人としての言語行動の中でさえも同時的に見られるものであろう。「位相」のように固定的な姿を見せるものではない。また、そのような観点の介入を許すというものでもない。

「女と書き物」の関係性は、やはり単純なものではない。二つをつなぐ「と」には、無限の深さがある。ただ、“男と書き物”という問題系が少なくとも管見では成立しにくいことは、書き物における女性ジェンダーの劣位を、それが言いすぎであれば、書き物におけるジェンダーの非対称性を、示していよう。

「女が読む／女が書く／女を描く」というシンポジウムの副題は、テクストを論じるときの、読み手、書き手、表現内容という 3 つの要素にそのままスライドしており、読み手・書き手のジェンダーが、言語表現を変容させる可能性を孕んでいること、表現内容もまた、ジェンダーの干渉を受けること、それは“自然”にそうなるのではなくて、ジェンダー構築的なメカニズムの中で、行われるものであること、などを仮説的に含意していることになるだろう。それらのことは、今回、各発表者のご努力によって、かなり明らかになったのではないか、とコーディネーターとしては自負している。

表現学会においても、より多くの研究者が、こうしたテーマに興味をもち、それぞれの分野で論じていただければ幸いであり、また今後とも是非、ご教示をいただきたいと願ってやまない。

（お茶の水女子大学）